AMEI NEWS

Association of Musical Electronics Industry

Vol. 49

2013 年 1 月 25 日発行

CONTENTS

- MIDI 規格 30 周年報告 1～4
- 著作権・ソフト委員会　音楽電子出版部会報告 5
- MIDI 規格委員会 TradeMark - WG 報告 6
- MIDI 検定委員会２級２次試験の変更について 7
- AMEI 会員名簿・MIDI 検定２級２次試験開催のお知らせ 8

MIDI規格誕生30周年を迎えて

今年は MIDI 規格が誕生して 30 年になります。そして昨年 12 月には梯郁太郎＆ Dave Smith 両氏の「Technical GRAMMY Award」受賞がアメリカ 2012 年 12 月 12 日付で、The Recording Academy から正式に発表されました。誕生から 30 年を迎える MIDI を、両氏がメーカーを問わない共通規格として制定に尽力され、その MIDI 規格がその後の音楽界に多大なる貢献をしたことが評価されての受賞とのことです。また、今年は MIDI 規格国際標準化事業の２年目となり、IEC への新業務項目（ＮＰ）の提案・国際規格原案（ＣＤＶ）の照会及び策定に向けて動き出す事になります。今後も MIDI 規格の安定的維持の為、また新興成長諸国において、各諸国発の国家標準や国際標準が日本の楽器・MIDI 機器関連のメーカーに対する貿易障壁となるリスクを低減する為、MIDI 規格事業の継続を、また製品安全・環境問題 / 著作権・ソフトに関する事業及び MIDI 検定事業について推進してまいりますので、本年もご協力のほど宜しくお願い致します。

上記ロゴは AMEI にて規格制定と共に作成されたロゴの一例です。

一般社団法人 音楽電子事業協会

MIDI 規格 30 周年報告①

MIDI 規格委員会の活動について

MIDI 規格委員会　委員長　飛河和生

今年は MIDI 規格が誕生して 30 年になります。これまで MIDI 規格の管理運営に携わって来られた会員企業の皆様には、多大なるご尽力を賜り、誠にありがとうございます。

MIDI 規格誕生当初は、5PinDIN の MIDI ケーブルによる電子キーボード同士の演奏情報のやり取りがメインでした。その後、コンピュータやシーケンサとのデータ通信が行われ、USB・IEEE1394・TCP/IP を用いた機器間通信、そして携帯端末など様々な市場へと広がってまいりました。また、コンテンツにおいても通信カラオケ、携帯電話着信メロディ、楽譜ツール、楽器系ゲームアプリあるいはソフトシンセやオーディオと融合した DAW(Digital Audio Workstation) などもそれぞれの市場を築いています。近年では MIDI を用いたスマホアプリ・タブレットアプリも多数登場しています。今後も情報機器やネットワークの発展と共に、MIDI 規格を通して音楽文化の創造に貢献して参りたいと思っております。

では最近の MIDI 規格委員会の活動状況について報告いたします。主な活動としては、MMA と連携し MIDI1.0 規格の CA や RP の追加規格審議の他に、HD プロトコルへの対応、MIDI 規格の国際標準化ならびに MIDI 商標の保護と活用の検討を通して市場の課題解決に努めています。

また、新たな MIDI 関連の技術の調査研究も行っています。

1）MIDI1.0 部会

MIDI1.0 規格に関する新たな追加規格や現状の規格管理を行っています。モバイル演奏インターフェイスや 3D 空間での演奏表現、楽器演奏情報そのものの記述分解能の向上などに続き、最近では 3.3V の MIDI インターフェイス追加規格についても話し合いを行っています。今後も電子機器ガジェットやモバイルアプリなど、新たな市場拡大に向け、会員の皆様からの積極的なご提案をよろしくお願い致します。

2）技術研究部会

HD プロトコルの対応や MIDI 関連の新技術・新商品の調査研究を行っています。HD プロトコルは昨年1月に行われた NAMM 会場での複数企業のアプリ間での接続実験が行われ、AMEI もオブザーバとして参加しています。今年の NAMM でも引き続き接続実験検証が行われる予定です。最近のトピックとしてはネットワーク上での MIDI 通信として、WebMIDI や演奏通信フォーマット、あるいはモバイル系のアプリなどがとりあげられ、調査研究・意見交換が行われています。

3）MIDI 国際標準化WG

経済産業省の支援のもと、MMA とともに MIDI 規格の IEC での国際標準化提案活動を行っています。IEC の国際標準フォーマットに則った規格ドラフトの細部を MMA と詰めており、近いうちに MMA の方針が固まり次第、IEC 中央事務局に提案をすべく準備中です。現在、2013/ 春の IEC 会議での申請に向けて、今年1月の NAMM が大きな山場になりそうです。

4）トレードマークWG

中国の企業より中国商標局に出願されている MIDI の商標に対し、MIDI の定義や互換性の確保による市場での混乱防止のため、MMA と連携して活動しています。

中国企業により中国当局に既出願された MIDI 商標の無効審判請求を行っています。

5）NAMM ツアーについて

MIDI 規格委員会として毎年ツアーを実施しています。NAMM では従来の楽器市場にとどまらず、スマホを利用した新しい試みやゲーム機器への応用、アナログ電子楽器の新たなムーブメントなど、世界の電子音楽・電子楽器市場の新しい動きをいち早く掴むことができます。今年度も AMEI 会員 11 名の皆さんの参加を得て、実施を予定しています。

今後とも会員各社の皆様のご協力を、宜しくお願い申し上げます。

MIDI 規格 30 周年報告②

新宿電子楽器祭　AMEI イベント報告

MIDI 検定委員会　委員長　大浜和史

MIDI 30 周年を記念する活動として MIDI 検定委員会、事業委員会、コンテンツ委員会は合同で「新宿電子楽器祭」（シンセサイザーフェスタ 2012）に参加いたしました。

主催：一般社団法人 日本シンセサイザー・プログラマー協会 (JSPA)
協賛：一般社団法人 音楽電子事業協会 (AMEI)
後援：公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会 (芸団協)、新宿区
協力：一般社団法人 日本作編曲家協会 (JCAA)、淀橋町会

開催会場の西新宿 芸能花伝舎では 10 月 6 日、7 日の両日とも多くの来場者で賑わいました。

「新宿電子楽器祭」会場　芸能花伝舎

以下はその報告です。

[MIDI 30 周年記念特別セミナー]

初日 6 日は 1 時より G1 スタジオにて AMEI 主催のセミナーを行いました。

「MIDI 誕生～現在、そして未来の MIDI」

則安治男氏をお招きして、ご自身のパイプオルガンとの関わり合いから電子楽器の開発、そして MIDI 誕生の背景と大変興味深いお話をして頂きました。会場では熱心にメモを取る学生、専門家も多く参加者は貴重な内容に聞き入っていました。

則安治男氏

「DAW マエストロ MIDI 検定 1 級」

作品制作となる MIDI 検定 1 級試験の実技と音楽知識を、課題曲を作曲された外山和彦氏が説明されました。スタジオミュージシャンの今泉洋氏は課題曲スコアにあるギターパートをギターで演奏し楽譜からの音楽表現を説明頂きました。さらにエンジニアの北城浩志氏からは、プロオーディオのクオリティーを DAW ソフトを使い説明頂きました。

北城浩志氏　外山和彦氏　今泉洋氏

[MIDI 30th Anniversary]

MIDI 30 周年アニバーサリー展示会場には MIDI 誕生前のシンセサイザー、始めて MIDI を搭載したモデルなど、会員各社にご協力頂いた貴重な電子楽器を展示いたしました。

[展示されたモデル]
ヤマハ：CS60, SY1, DX7, VP1, EOS
ローランド：SH-1000, MC8, MSQ-700, JUPITER-6,JUNO-106
コルグ：POLY61, miniKORG700, M1, デルタ , MonoPoly

往年の電子楽器を展示

尚、MIDI 30 周年アニバーサリー展示会場にて、シンセサイザーの誕生から MIDI 規格と音楽制作環境の進化の歴史について、ショートムービーを作成し放映致しましたが、再編集したものを AMEI ホームページ上にて見ることが出来ますので、是非ご覧下さい。
http://www.amei.or.jp/
また、MIDI 30th Anniversary ロゴを制作いたしましたので、ホームページ等に本ロゴ をご活用頂き、更なる MIDI の啓蒙・普及促進へのご協力をお願い致します。
http://www.amei.or.jp/logo_2012.htm

MIDI 規格 30 周年報告③

MIDI 30 周年記念特別セミナー報告

メディアコンテンツ委員会　委員長
尚美学園大学教授　古山　俊一

MIDI が登場してから 30 年、早いものである。昨年は新宿電子楽器祭において「MIDI30 周年　特別セミナー　MIDI 誕生、現在、これからの MIDI」という特別セミナーを企画した。MIDI が登場して 30 年ということを祝う意味を込め、また当時のことを知らない若い人たちにも優しい語り口でわかりやすく解説していただける方をと考えてピンと来た。実際に MIDI 誕生に係わった則安治男氏を特別ゲストとしてお招きした。則安氏は MIDI 誕生当時はローランドの常務取締役を務めておられていた方である。筆者も学生時代から面識があり実は初めてお会いしたのは小学生の頃なのである。

最初のお話は則安氏と音楽の出会いであったが戦後間もない子供の頃にピアノやオルガンに触れ、特にオルガンは友人に誘われパイプオルガンを教会に聴きにいきその音色の美しさに惹かれたそうだ。同時にアンプ製作やラジオ製作にも子供の頃より大いに興味があり音楽とこれらへの興味が重なり日本の電子楽器の発展につながっていったのだろう。

学生時代には演奏活動、執筆活動にいそしんだそうだ。演奏活動は当時出始めたヤマハのエレクトーンやハモンドオルガンなどを演奏できるプレイヤーがいなく則安氏は貴重な存在であった。日劇で越路吹雪のバックでハモンドオルガンを演奏されたそうだ。

執筆活動は「泉たかし」のペンネームで誠文堂新光社の「無線と実験」の製作記事である。電子楽器やアンプの製作記事が毎号載っていて筆者も小学生の頃から読んでいた。実体配線図も多数載っていて子供でも作ることは不可能ではなかった。

その後電子楽器メーカーとのつながりから電子楽器の設計や製作に携わる。則安氏の関わった電子楽器にはさまざまのものがある。例えばクロダトーン、テスコでのエフェクターや電子オルガン、京王技研（現 KORG）のドンカマチックやエース電子工業からローランドの電子楽器群だ。

いよいよ MIDI の登場となるのだが当時はアナログシンセサイザーの全盛期。レコーディングスタジオでもマルチトラックレコーダーとシンセサイザーを使った「打ち込み」という音楽製作スタイルが普及し始めてきた。冨田勲氏の油絵を想起させる色彩感豊かなシンセサイザーによる深いサウンドも YMO に代表されるテクノポップと呼ばれた切れ味の良い魅力的なシンセサウンドもローランドのマイクロコンポーザー MC—8 とさまざまなメーカーのシンセサイザーを組み合わせたシステムが使われていて豊かなサウンドを作り上げていた。そのきっかけとなったといえる。マイクロコンポーザーはカナダの作曲家ラルフ・ダイク氏のアイディア（もともとはディスクリートで試作していた）を元にローランドが製品化したが則安氏はこの商品が単に譜面の音符データを記録再生するものであれば音楽的に意味がないと考えていたようだ。しかしダイク氏も同じことを考えていた。数系統のコントロール電圧を使って演奏データを受ける MIDI の重要なコンセプトである音楽情報を数値化するわが国や欧米で音楽の情報をデジタルで扱い易いように数値化する際にマイクロコンポーザーの考え方がＭＩＤＩでの音楽情報を数値化する基本的考え方はマイクロコンポーザーの延長上にあると考えられる。ＭＩＤＩ規格が大きな変更もなく 30 年使われてきているのはこのときの考え方が音楽的で無理のないものであったからだろう。アナログシンセサイザーのモジュールに接続し同時に数種のパラメータをコントロールできるもので生きた音楽を作り上げることができるものだ。このシーケンサーとさまざまなシンセサイザーを使ってＹＭＯや冨田先生の名作が作られているのはいうまでもない。

1982 年 MIDI が登場し MIDI を搭載した楽器が市場に登場しはじめた。早速登場した 2 台を MIDI によって接続したら音が鳴り止まないと言うトラブルが生じた。これは MIDI を前面に売り出していくこれからの楽器業界にとってもよくないことである。世界共通の規格であることを強調するためにもどちらが悪いといった評判を立てることなく原因を究明し解決すべきだろう。ＭＩＤＩ規格に対しての解釈を共有するためＭＩＤＩをチェックするためのアプリケーションを作成し各メーカーに無償で配布した。MIDI を管理するために 1983 年に MIDI 規格連絡協議会設立しこれが現在の音楽電子事業協会

古山　俊一氏　　則安　治男氏

大浜和史氏　　則安　治男氏　　古山　俊一氏

（AMEI）につながっている。

MIDIはその後発展を続ける。メディア界や社会の動きや要求の影響を受けMIDIには新しい機能が加わっていく。RP（Recommended Practice）と呼ばれる拡張規格には「スタンダードmidiファイル(SMF)」や音源の音色配列の統一化するための「GM」やさらに上位規格として策定された「GMレベル2」。携帯電話の普及に伴い着信メロディーを製作するための規格「General MIDI Lite (GML)」も加わった。最近では電子楽器で映像をコントロールする世界共通規格「MIDIVisual Control」も加わり当初MIDIが登場したときには想像もできなかったくらい格段にMIDIの活用領域は広がったと言えるだろう。

当初MIDIは端子としても見える形でイン、アウト、スルーの3つのDIN端子がキーボードなどのリアパネルにあった。使用するときはMIDIケーブルをこれらの端子に接続して使った。これらの端子はMIDI信号が流れているという象徴でありMIDI機器であることが確認できた。

しかし現在MIDIの情報はUSBでも伝送されLAN上にも伝送されるようになった。当然無線LANでも伝送できるようになりコードレスでもMIDIが使えるようになりユーザーはモバイル機器などで当たり前のように使っている。例えばipadやiphoneをコントローラーとして離れた場所のMIDIシステムを演奏したりMIDIによって音楽以外のコントロールも例えば「ビジュアルコントロール」を使用して映像を演奏することも可能である。こういう時代になってくるとMIDIが使われているのかは目に見えなくなって来る。いわゆるブラックボックス化してしまう。多くのユーザーはなぜ動くのかわからないで使う。どんな媒体を流れようがMIDI規格である。どう信号が流れるとかどのようなパラメータがコントロールされているのかを確認しないと音楽的な表現力に限界がある。発展性や応用性を考えるとMIDIの基礎知識をしっかり身に付けているほうが良いに決まっている。そのためにもMIDIのテキストを活用したりMIDI検定を活用していただきたい。

音楽電子出版部会レポート

著作権・ソフト委員会 音楽電子出版部会　村上博幸

2012年：訪れた電子書籍元年において

過去に数回「電子書籍元年」がありました。その都度注目しましたが、実際は穏やかに過ぎてしまいました。そして2012年、今度こそ来たように思います。何しろストアが次々と誕生しました。ハイペースの出店の背後にあったのは、まだ見ぬKindleへの意識でした。そして10月下旬、そのKindleも開店しました。ストアの増加だけではありません。タブレットのリリースも華やかでした。これまでのiOS/androidの二極だけではなく、Kindle、Windows含め、11月にはプレーヤーが勢揃いしました。もとよりスマートフォンが急速に普及した上半期でしたから、サイズの大小を問わなければ、ユーザーは何らかの対応端末を手にするまでになりました。私が部会長を拝命した3月でさえ、ここまでの進展は想像していませんでした。これはいよいよ「電子出版」にとって明るい時代の幕開けに違いありません。

会員自主参加型の部会を推進

部会は2時間、月一回のペースで行っています。毎回決められたテーマに沿って、メンバーが自発的にプレゼンを行い、質疑応答、意見交換、という流れです。内容を少しご紹介しますと、BookLive坂田泰則さんの電子書籍業界プレゼン（5月）、違法楽譜/歌詞サイト調査レポート（6月）、電子出版EXPO視察レポート（7月）、タブレット端末市場動向レポート（11月）などです。また、電子流通の発展に比して著作権整備が遅れている現状より、JASRAC協議申し入れに向けた準備セッションも行いました。このテーマを通じメンバーが得たものは、近未来の著作権管理面の課題の掌握、権利者/使用者の立場を越えた業界発展の道筋の共有、であったと理解しています。硬派なテーマでしたが、著作権ソフト委員会戸叶委員長、音楽配信部会堀江部会長のお力添えにより、またメンバーの熱意により(全10社15名の選りすぐりの「電子好き」の集り)、乗り切ることが出来ました。

JASRACとの協議における利用者代表として

また、当部会は著作権・ソフト委員会のソフト規格部会より、NMRC-DMN-WGの機能を引き継ぎました。DMN-WGは著作権等管理事業法における利用者代表として、著作権管理団体との協議の有資格組織として認められています。楽譜配信について、NMRC傘下の他団体との連携をとりながら、適切な使用料と許諾スキームを協議していきます。

所感～「音楽」の「電子出版」を研究するということ

冒頭に電子書籍の活況について述べました。しかしながら、その中での音楽コンテンツはまだ小規模な領域です。楽譜に限って言えば、現状ほぼ200億円の業界売上のうち、電子部分は推定12億に過ぎません（4年後には3～4倍と見られていますが）。こうした規模感に基づきますと、「電子」の位置付けは、「紙」と合わせた市場開拓の協力者であって（陸上競技で言えば「ペースメーカー」）、「紙」と競合することではないように思われます。またこの業界は未来に渡っても、楽器演奏者の最良の道具である楽譜（その形態がどのように変わっても）を生産していきますので、理不尽な衰退は避けなければなりません。そうしますと自ずと、新技術への理解、違法サイトの警鐘、ユーザー動向のキャッチ、等が必要になってまいります。例えば、ボーカロイドに代表されるＣＧＭの世界はどうでしょうか。今やユーザーはプラットフォームを経由して、簡単に自主出版ができてしまうのです。

このような、「音楽」の「電子出版」にまつわる総合的な情報交換の場、それが当部会の役割なのではないか、と感じています。

ユーザーがすっかり先行してしまった私たちの業界。周回遅れのレース環境での「紙」と「電子」の伴走。それはもはや何の躊躇も要らない、踏み出すべき次のステップのように思われます。

MIDI 規格委員会トレードマーク WG 報告

MIDI 商標の保護について

MIDI 規格委員会 トレードマーク WG 石井　譲

MIDI 規格がスタンダードになるにつれて、ディファクトスタンダードのままでは、正しく将来に継承されなくなるという懸念に対処する為、今年度 MIDI 規格 30 周年を契機に、① MIDI の国際標準化、② MIDI 商標の保護、の活動を開始いたしました。

当、商標ワーキンググループ（TM-WG）では、①の活動を側面から支える目的で②の活動を進めています。

TM-WG が作られるきっかけとなったのは、2007 年 8 月に中国で商標登録された、中国楽器メーカー の商標「MIDI」（図 1 参照）でした。AMEI に関わる業界では、「電子楽器の演奏データを機器間でデジタル転送するための世界共通規格」としてよく知られている名称「MIDI」が、中国において、楽器のブランド名として登録されてしまった事は、中国における音楽クリエイターや電子楽器ユーザーに対しても無用な混乱を招く懸念があると同時に、中国における音楽・楽器産業にとって大きな障害の一つになってしまう可能性がある事を意味します。この障害を問題が起きないうちに解決するために、TM-WG が作られ、その対応について協議をし、対応策の実施を進めています。

対応については、次の２つになります。

１．中国楽器メーカーの登録商標 MIDI を無効にする。

現在、当該登録商標「MIDI」の登録に対して、中国楽器協会（CMIA）と AMEI は、別々に登録無効の訴えを起こしています。TM-WG が対応策を検討している間に、CMIA は登録無効の訴えを起こしました。その後、TM-WG では、MMA を通して CMIA の情報を入手し、CMIA とは違った視点からでの登録無効の訴えを起こしました。これは、CMIA の訴えが認めたれなかった場合の保険としての意味合いも持っています。

２．MMA と AMEI を権利者として中国で商標 MIDI の商標権を獲得する。

当該登録商標「MIDI」を無効にする事と共に、中国において商標「MIDI」の商標権を獲得する為の出願準備を行っています。これは、当該登録商標「MIDI」が無効になった場合に、直ちに権利が取得出来るよう、当該登録商標「MIDI」の無効が決まるより前に出願手続を行うことです。その際に、MMA と AMEI が出願人となり、「普通商標」（商品･役務の名称）ではなく「証明商標」（特定の商品又はサービスに対して監督能力を有する組織が管理しており、当該組織以外の単位又は個人がその商品又はサービスについて使用し、当該商品又はサービスの原産地、原料、製造方法、品質又はその他の特定の品質を証明する標章）での商標権取得を目指しています。この証明商標の権利を取得することにより、本来の『世界共通規格』の名称としての権利が取得されることになります。

TM-WG では、国内の弁理士にもアドバイザーとして協力を依頼し、中国の特許事務所と調整を取りながらこれらの問題の対応を進めています。

図１（中国登録商標）

参考：AMEI が国内で所有している、楽器及び電気・電子機器分野での団体商標

図２－１

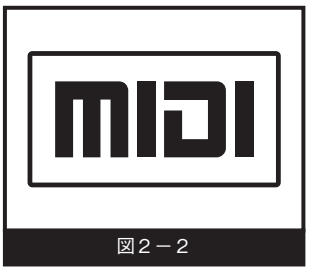

図２－２

図２－３

図２－４

図２－５

図２－６

図２－７

図２－８

※団体商標：団体が所有し、団体の構成員が使用する商標。

MIDI検定委員会2級2次試験の変更について

MIDI 検定委員会

MIDI 検定がスタートした平成 11 年当時、コンピューターのソフトウエアによる MIDI シーケンサーの急速な普及と共に、音楽制作や電子楽器における MIDI の知識が重要視されてきました。そこで、これらをまとめて学ぶことができるガイドブックとして「MIDI 検定 3 級ガイドブック」を発刊し、同時に「MIDI 検定 3 級試験」を実施したのが「MIDI 検定試験」の始まりです。

その後、さらに踏み込んだ MIDI 規格の知識や当時の言葉で「マルチメディア」と称される分野の内容を盛り込んだ「MIDI 検定 2 級ガイドブック」を発刊して「MIDI 検定 2 級筆記試験」を実施。さらに DAW ソフトを使用した MIDI 入力の技能を認定する「MIDI 検定 2 級実技試験」を開始し、実技試験合格者には指導者講習を経て指導者認定を行うなど、教育的な制度の充実も図ってきました。

一方でメモリープレイヤーでの音楽再生やデジタルレコーディングの活用が一般化され、音楽を作る、聴く、楽しむ、といった際に使用されるメディアにも変化が現れてきたため、これらの内容をまとめたガイドブック「ミュージックメディア入門」を発刊し、入門者向けの「MIDI 検定 4 級」も開始しました。

この頃から、MIDI を中心にデジタルオーディオやシンセサイザーでの音作り、エフェクト、ミキシングの知識、著作権、新しい音楽の記録媒体ならびに音楽配信にまつわる知識など、現代の音楽制作に欠かせない知識が多岐にわたってきているという状況が顕在化し、「MIDI 検定」においても内容に盛り込むべきでは無いかという論議がなされてきました。

また、平成 22 年 1 月には「MIDI 検定」の最上位グレードである「MIDI 検定 1 級」を実施。未発表の楽譜から MIDI を使って演奏データを作成し、それを元に音楽 CD を作成するという、まさにプロの仕事と同レベルの音楽制作技能を体験する試験を開始しました。ここでも単に MIDI データを作成するだけで無く、音として聞ける形に仕上げてメディアに固定する作業が含まれるなど、「MIDI 検定」における「MIDI 規格」以外の領域が含まれる形となりました。

これらの状況から 10 年以上前に作成した 3 級、2 級ガイドブックの内容を再考し、1 級受験を含む今の時代にふさわしい「MIDI 検定」の指南書として、「ミュージッククリエイターハンドブック」を平成 24 年 2 月に発刊しました。これに伴い、平成 24 年 12 月の 2 級、3 級筆記試験より、新たな試験範囲での筆記試験を実施し、より現代の音楽制作の実情に近い内容を学習していただいております。

さらに 2 級実技試験に関しては、名称を「2 級 2 次試験」とし、今まで MIDI によるデータ入力のみで採点していた内容を、オーディオファイルの提出までを含めたものに変更しました。この「2 級 2 次試験」は試験会場で実施される筆記試験に、「MIDI 検定 1 級」で取り入れられている課題提出を加えた形で実施され、受験者は各自の環境で落ち着いてデータ制作の実力を発揮することができるようになっています。

今回の変更により、音楽制作の現状により近い形で資格の認定を行うことができると同時に、音楽制作における MIDI 規格のすばらしさを実感できる内容になったと感じております。4 級から 1 級まで、難易度に幅はありますが、「MIDI 検定」を通じて音楽制作の楽しさが一人でも多くの方に伝わればと考えております。

昨年まで行われていた「2 級実技試験」と新しい「2 級 2 次試験」との違い（変更点）は下記の通りです。

2 級実技試験（今まで）

およそ 1 ヶ月前に課題曲 4 曲が発表される

→ 試験会場で、コンピューター、DAW ソフトウエア、MIDI 音源、MIDI キーボードが貸与され、その場での作業が要求される

→ 課題曲のうち一曲が出題され、与えられたデータ内の欠落部分に 90 分間でデータ入力を行う（20 小節分）

→ 完成したデータをスタンダード MIDI ファイルで保存
データ CD に書き込んで提出

採点基準は、ノートミス（－ 4 点）、ニュアンス違い（－ 1 点）など、減点法で行い、100 点満点中 80 点以上で合格

2 級 2 次試験（改訂後）

およそ 1 ヶ月前に練習曲 4 曲が発表される

→ 試験会場で、制作規定書、課題曲が配付される。
また、採点基準や制作に関する講義が行われた後、課題曲に関する筆記試験を実施。

→ 制作規定書および課題曲の楽譜を持ち帰り、各自の環境ですべての小節を入力する。
また、完成したデータを任意の音源で再生し、オーディオ化する

→ スタンダード MIDI ファイルと 44.1kHz16Bit ステレオの WAV ファイルにしたオーディオファイルとを、データ CD に書き込み、書留または宅配便などで提出（試験の 2 日後消印有効）

筆記試験は 20 点満点、課題提出は 80 点満点の合計 100 点満点中 80 点以上で合格

課題提出の MIDI データに関する採点は、ノートミス（－ 4 点）、ニュアンス違い（－ 1 点）など、80 点満点からの減点法で行う。
オーディオデータに関しては、雑音、音切れ、フォーマットなどをチェックし、MIDI 部分のレギュレーション違反（フォーマット的な不具合）と合わせて最大－ 3 点の範囲で減点する

東日本大震災、並びに福島第一原子力発電所事故により
被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。
被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

会員名簿

50 音順　2013 年 1 月 25 日現在

あ
- Apple Japan 合同会社

い
- 株式会社インターネット
- インフォコム株式会社

え
- 株式会社エクシング
- 株式会社エムティーアイ

お
- 株式会社音響総合研究所

か
- カシオ計算機株式会社
- 株式会社河合楽器製作所

き
- 株式会社キューブ

く
- クリプトン・フューチャー・メディア株式会社
- クリムゾンテクノロジー株式会社

こ
- 株式会社コルグ

さ
- 株式会社サイバード
- 株式会社サミーネットワークス

し
- 株式会社シーミュージック
- JVC ネットワークス株式会社
- 島村楽器株式会社
- 学校法人尚美学園
- 株式会社シンクパワー

す
- 株式会社ズーム
- 株式会社鈴木楽器製作所
- 株式会社スリック

せ
- セイコーインスツル株式会社
- 株式会社セガ

た
- 株式会社第一興商
- 株式会社タムラ製作所

て
- ティアック株式会社
- 株式会社ディーアンドエムホールディングス

と
- 東映ビデオ株式会社
- 株式会社ドワンゴモバイル

に
- 学校法人片柳学園 日本工学院専門学校・日本工学院八王子専門学校
- 日本シンセサイザープログラマー協会

は
- パイオニア株式会社

ふ
- 株式会社フェイス
- 株式会社フェイス・ワンダワークス
- 株式会社フュートレック

へ
- ベスタクス株式会社

み
- ミュージックノート株式会社

や
- ヤマハ株式会社
- 一般財団法人ヤマハ音楽振興会
- 株式会社ヤマハミュージックメディア

ら
- 株式会社ラグナヒルズ

り
- 株式会社リットーミュージック
- 株式会社リムショット

ろ
- ローランド株式会社

〈正会員会社 46 社〉

＊賛助会員
- 中音公司（中華人民共和国）
- 株式会社博秀工芸
- 株式会社ミュージックトレード社

〈賛助会員会社 3 社〉

MIDI LICENSE

MIDI検定２級２次試験実施のお知らせ

平成24年度
「MIDI検定」
● ミュージッククリエイターの為の認定制度

第14回
MIDI検定2級2次試験

［試験期間］2013.2/16(土)～2/17(日)

30th Anniversary MIDI MIDI規格 誕生30周年

MIDI 30 years MIDI Makes Music

AMEI/MIDI 検定の Web サイトをリニューアルいたしました。

http://www.amei.or.jp/index.html
http://www.midilicense.com/

まだ修正途中ではありますが、各種情報をより分かりやすくお伝えできるように構成やデザインを見直しました。
ご意見・ご要望等ございましたら事務局までお寄せ下さい。

AMEI NEWS　Vol.49 / 2013.1.
一般社団法人音楽電子事業協会　機関誌
発　行：一般社団法人音楽電子事業協会　事務局
〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-16-9 イトービル 4F
TEL.03-5226-8550　FAX.03-5226-8549
発行人：岩崎修三
編集人：石黒士郎（広報委員会）
編集協力：株式会社 博秀工芸
ホームページアドレス：http://www.amei.or.jp/